

子育てを取り巻く環境

わたしたちを取り巻く社会環境が日々変化していく中で、家族の在り方や子育ての環境も従来とは大きく変わっています。

三世代で同居する世帯が多かった時代には、親が働いていても子育て経験のある祖父母を頼りにでき、兄弟姉妹の数が今よりも多かったため、兄や姉が弟や妹の面倒を見ることが子育ての一助となっていました。

また、地域では、先輩ママに子育ての悩みを打ち明けたり近所で親交のあるおじいちゃんやおばあちゃんに子どもを預かってもらったりするなど、周囲とつながりを持ちながら子育てをする光景がみられました。

しかし、高度経済成長期以降、家族形態は大きく変化しました。

現在は、地方から都市圏に就学や就職をして、そのまま定住するケースが多くなったことや転勤などにより子どもが祖父母の世代と離れて暮らすなど、核家族化が進み、子どもが多くの人に見守られて生活することが減ってきました。

さらに、女性の社会進出が進み、男女問わず自己実現の場が広がったことや養育費などの子育てに係る経済的負担などから共働き家庭が増加しました。

こうした子育て環境の変化により、「子どもを安心して預ける場所がない」、「身近に子育てを助けてくれたり相談したりできる家族や友人がいな



い」などといった、子育て世帯の不安の声を聞くことがあります。また、地域とのつながりの希薄化によって、声を掛け合える『ご近所さん』も少なくなっています。このような現状は本市でも例外ではありません。

子育てに関わるみんなの笑顔のために

子どものかわいい笑顔やすやすやと眠る寝顔、元気いっぱい

に走り回る姿は、今も昔も変わらず、家庭やその周囲にたくさんの喜びや安らぎを与えてくれます。

そしてそこには、子育ての悩みや不安も存在しています。一人ひとりのライフスタイルや家族

というものの価値観・形態が多様化している中で、それぞれが抱える『子育ての悩み』は家庭環境や子どもの年齢によっても異なります。

子育てを家庭内だけで担うことが難しくなっている今、市は、子どもを産み育てやすいまちを目指し、さまざまな子育て支援を実施することで、子育て世代の育児負担の軽減に努め、楽しく子育てできるように取り組んでいます。さらに、地域でも、まちの将来を担う子どもたちとともに育む取り組みが進められています。

今号では、市や地域がどのような取り組みをしているのか、そして、その取り組みは皆さんにとってどのような手助けとなっているのか、子育てに関わるさまざまな方のインタビューなどを通じてご紹介します。

進む日本の少子高齢化

日本の年間の出生数は年々減少傾向にあります。日本の合計特殊出生率は、過去最低となった平成17年の1.26から少しずつ増加しているものの、平成26年は1.42とまだまだ少子化は続く傾向にあり、さらに、登別市の合計特殊出生率※（平成20～24年）は1.36と国の平均を下回っています。

※合計特殊出生率…一人の女性が一生

に産む子どもの平均数を示すもの

出典：平成27年人口動態統計の年間推計（厚生労働省）、平成27年10月策定『登別市まち・ひと・しごと創生総合戦略（人口ビジョン）』

人口推計から見る登別市のこれから

平成27年10月に策定した『登別市まち・ひと・しごと創生総合戦略（人口ビジョン）』で登別市の人口推計を見ると、0歳～14歳の年少人口と15歳～64歳の生産年齢人口は年々減少。65歳以上の老年人口は平成32年までは増加するものの、その後は減少すると予測されています。また、高齢化率（総人口に占める65歳以上の割合）は将来ますます高まり、平成52年には39.6%に達するとされています。

登別市の年齢別人口構成比の推移

